

ペースタロッчи教育賞 受賞者紹介

しいのみ学園園長

しょうちさんろうじ 氏

也三郎氏は、1906(明治39)年北海道釧路に生まれた。日露戦争に従軍した父に倣い、軍人となることを目と見て、父の元で兵庫県立幼年学校の初日を経て、広島幼年学校へ入った。しかし、受験した廣島幼年学校の初日を夢体检査において、目が悪いとの理由で不合格となれた。見ていた。氏に対し、父は「子供と暮らすか。」の身停絶された。氏は「5年間の長きにわたり教育に身を投じと言までなる。」
今日こそ卒業した氏は、山村の小学校に赴任

るこ島師範学校を卒業した氏は、西行の子供時代に足住
広島村の貧しい生活のなかでも、子供は純真でたく
まく笑ってはいた。子供らに向けられた氏の眼差しは

広島村の貧しい生活のなかでも、子供は純真でたくましく生きていた。子供らに向けられた氏の眼差しはする。生きとして、文芸雑誌『潭海』や中国新聞に発表まし作品など。「早引きをせし教え子は田にありて夕文学化いや。『稻刈り居り』は、その1つである。されどびで教員生活の後、広島師範学校専攻科に入学陽を涙間の教育学者として金監をしていた教育学者、玲村

2年生となる。そこで吉監をしていた教育学者、玖村氏は、玖村から人生観が変わるほど多く寄宿生会う。氏は、玖村の影響を受けた。師のようになりたいと、何十倍も敏雄影響を受けていた。広島高等師範学校の入学試験に挑戦した大な闘争であったが、同じ4月から高等師範学校教授の難關へいた。ペスタロッチャーの『シュタント便り』で読み、吉田松陰研究の指導を受けた。隣家に就任しに詰み、家族のように気にかけていただいた。をとも借りて住み、任後、広島文理科大学で勉学を再開下宿を小学校に赴く。熱に侵されて脳性小兒麻痺となる。

義務教
かつた

猶子泣て涙学祖伝家では就つ子先由か
次男も長男と同じ小児麻痺となりが、抱き合意を決し、たれま
の 次男と退学を余儀なくされた長男」を設立し理り、
いていた。1954(昭和29)年、氏はわないとのそを与
来の家屋敷を売って「しいのみ学園」を設立し、それを与
供のことを考えた施設が、基準に合。しかし、ぐり広
ら行政による支援は得られなかつた。居場所をつくり感
で教育界から無視されてきた子供たちに拠りよ
うした行き場のなかつた子供の親は、手記にじてひび
そく施設となつた。氏の献身的努力が、一つひとび
えく知られるところとなり、映画化され奉い理
動を與えた。育に生涯をあこへてい

その後も氏は、一貫して障害児教育とが修められて編み出され、長岡市に「吉川義塾」は、その実践は、その強い教育愛と子供の成長を推進する。医学に裏打ちされた理論によつて、学会で注目される新知見の創発が、不即不離能性を引き出す教材や教育法の開発が、芸術大学（現貴志塾）は大いに進められているのである。新制福岡学の制度化を手掛けた。その最高峰（大学）においても、障害児教育をはじめ、常に先進的モデルを示して、年に韓国へと日本にとどまらず、1982（昭和57）このをはじめ、氏に教授兼大学院長として招かれ、いまなお世界へと広がっている。学生であることを、涯

昇地氏の人生の師であった玖村は「はしがき」生躍
とともに読んだ『シュタンツ便り』韋大なる人の本がも、
とどことばで始めている。「およそ」そこに全く三
次のことは、その何れの部分をとっても、野に耕すところ、
次は、その何れの部分をとっても、一貫して常に全く、
如として生きているのである。隠れて公に働くときも、成敗得失をいふ。ペスク、タ
顕れて公に働くときも、成敗得失をいふ。ペスク、タ
格の風光が悠々として表現せられて、して短くは、ア生
チーの生涯は、歴時的にいっても決た。」このペ
内容的に見ても極めて波瀾が多かつて、そのまま昇地氏奉に
ロッキーに捧げられたことばは、生涯を教育に奉し、
ロッキーに描いているようにさえ思える。生涯施設を、ま没教育
「いいのみ学園」という妥協なき教育うつて創立め
それを必要とする人たちに私財をなげさせた。この度
これを支える教育理論と実践を発展分け隔てなく現役として
を必要としている人たちには、国のお現役として 5回
ていくことを生涯の課題として、な 緒に 11
組んでいる。 緒に対し、第。

久地三郎氏のこの長年にわたる功績を顕彰したい。
ペーパタロッチー教育賞を贈呈し、高く